

第2回 シェイクスピア勉強会（オンライン） 報告

北村紗衣

2021年2月20日（土）の13時より、第2回シェイクスピア勉強会がZoomを用いて実施された。新型コロナウイルスの流行によって対面で学会が開催できなくなったため、2020年9月22日に第1回オンライン勉強会が実施されたが、この勉強会はそれに続くものである。テーマは「2010年代の史劇の映像化～『ホロウ・クラウン』と『キング』を中心に」ということで、2012年及び2016年に2シーズンにわたってBBCで放送されたヘンリアド及び薔薇戦争サイクルのテレビドラマ化である『ホロウ・クラウン』と、2019年にNetflixが配信したヘンリアドの映画化『キング』を題材に、三本の発表とディスカッションが行われた。

最初の発表は塚田雄一「「ヘンリー五世は戦争犯罪者か」という問いを2010年代に再考する—『ホロウ・クラウン』と『キング』—」であった。本発表はシェイクスピアのテキストおよびその映像化作品における「問題のある王」としてのヘンリー五世像を考えるものである。塚田は、フランス人捕虜殺害命令を下すヘンリー五世は戦争犯罪者ではないかという有名な議論を取り上げた上で、特に『ホロウ・クラウン』と『キング』の間に捕虜殺害命令の演出方法やイングランドによるフランス侵攻の大義名分の提示の仕方に違いがあることに焦点を当てて二作品を分析した。本発表でも言及された『キング』におけるフランス軍によるイングランドの子供の残虐な殺害場面は発表後のディスカッションでも取り上げられた。

次の発表は組織者である北村紗衣による「ポスト『ゲーム・オブ・スローンズ』時代のシェイクスピア史劇」であった。この発表は、2011年から2019年にかけて放送されたHBOのドラマ『ゲーム・オブ・スローンズ』がそれ以降のシェイクスピア劇やその翻案に影響を与えていることを指摘するものである。ケーブルテレビ局であるHBOは地上波で放送できないような露骨な描写を得意としており、暴力描写や性描写、撮影技術などについて、『ホロウ・クラウン』も『キング』も『ゲーム・オブ・スローンズ』から目に見える影響を受けており、観客もそれを意識して鑑賞している。発表後のディスカッションで議論されたように、塚田の発表で取り上げられた『キング』の子供殺害描写についても、『ゲーム・オブ・スローンズ』が作ったトレンドが影響している可能性もある。

最後の発表は、『ホロウ・クラウン』の日本語字幕を担当した柏木しょうこによる「「ホロウ・クラウン」字幕翻訳から考える作品の読み解き方」であった。これは字幕作成において翻訳家がどのように作品を理解し、字幕作りにつなげているかを解説するものである。本発表によると、シェイクスピアの翻案の場合は「自然な会話を心がけながらもシェイクスピアらしさを損なわない」ことが重要である。この「シェイクスピアらしさ」は具体的にはどのようなものであり、どうすれば翻訳から醸し出すことができるのかというのはシェイクスピアの研究・翻訳に携わる者にとっては大きな関心事であり、発表後の質疑応答においても議論された。

第2回 Zoom 勉強会は、第1回の際に今後はパネルディスカッションを行って欲しいというコメントがあったため、それを受けて実施されたものである。終盤は質問も比較的たくさん出て有意義な議論が行われた。先の見えない感染症流行の中、このような形で研究活動の推進を続けることは重要であると思われる。勉強会を盛り上げてくださった参加者の会員の方々、河合祥一郎会長、事務局の菅原さんには感謝を申し上げたい。